

御霊によって歩みなさい

ガラテヤ人への手紙 5章 16-26節

はじめに

今日は、「ペンテコステ」です。「ペンテコステ」は、「聖霊降臨日」とも言われ、この地上に「聖霊」「御霊」が降られたことを記念する日です。そのため今日は、「聖霊」「御霊」について、「ガラテヤ人への手紙」から学びたいと思います。

使徒パウロはこの手紙で、「**あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか**」(3:2)と言っています。つまりパウロは、イエス様を信じた人は、御霊を受けていると教えています。また、こうも言っています。「**あなたがたが子であるので、神は『アバ、父よ』と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました**」。御霊は、神様のひとり子であるイエス様の霊です。それゆえ、イエス様を信じて神様から御霊を受けると、イエス様と同じように神様の子どもとされ、神様を「父」と呼ぶことが許されます。そして御霊は、イエス様を信じる人の心に遣わされるのです。

イエス様を信じる人の心には、イエス様の霊である御霊が共におられます。それゆえイエス様は、御霊を通してイエス様を信じる人の心に共におられます。そしてイエス様を信じる人は、神様の子どもとされ、神様を「父」と呼ぶことが許されているのです。

1. 御霊と肉の対立

16-18節を見てみましょう。「**私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らうからです。この二つは互いに対立しているので、あなたがたは願っていることができなくなります。御霊によって導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません**」。

パウロは、肉の欲望に従って歩むのではなく、御霊に従って歩みなさいと教えています。「肉」というのは、「体」とか「人間」と訳される「サルクス」という言葉ですが、ここでは生まれながらの人間の性質という意味だと思います。「生まれながらの」というのは、イエス様によって「新しく生まれていない」「罪によって墮落したままの」人間の性質と言えます。

聖書によれば、私たち人間は誰でも、アダムとエバが神様の命令に背いて禁断の木の実を食べた時から、罪の性質を持って生まれてきます。誰でも生まれながらに、罪の性質を持っているのです。しかし、私たちがイエス様を信じる時、私たちは御霊によって新しく「神様の子ども」として生まれるのです。そして御霊は、私たちの心に住まわれるのです。しかし、私たちはイエス様を信じる時に、罪の性質が全くなくなるわけではありません。私たちにはまだ罪の性質が残っているのです。私たちの罪の性質が完全になくなるの

は、私たちが天国に行く時、またイエス様がこの地上に再び来られる時です。私たちは、生涯の最後まで、罪の性質を抱えながら生きていくのです。

その意味で、イエス様を信じる私たちの内には、「肉」と「御霊」が共存しているのです。パウロは、「肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らう」「この二つは互いに対立している」と言っています。イエス様を信じる私たちの内には、絶えず「肉」と「御霊」が対立していて、戦いが起こっているのです。

だからパウロは、「あなたがたは願っていることができなくなります」と言っています。御霊に従って歩みたいと願っていても、肉の欲望が足を引っ張るのです。また肉の欲望に従って歩みたいと願っても、御霊が私たちの良心を責めるのです。あのパウロでさえ、自分のうちに起きている「肉」と「御霊」の戦いに苦しんだのです。ローマ7章でパウロは、こう言っています。「**私には、自分のしていることが分かりません。自分がしたいと願うことはせずに、むしろ自分が憎んでいることを行なっているからです**」(ローマ7:15)。「**私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。私は、したいと願う善を行なわないで、したくない悪を行っています**」(ローマ7:18-19)。「**私は本当にみじめな人間です**」(ローマ7:24)。

イエス様を信じる私たちは、生涯の最後まで、この「肉」と「御霊」の戦いの中で生きていかなければなりません。しかしパウロは、「御霊によって導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません」と言っています。「律法の下」にはいないということは、「恵みの下」にあるということです(ローマ6:14)。また罪が私たちを完全に支配することはないということです(ローマ6:14)。イエス様を信じる私たちの内には、御霊がいてくださるので、決して罪に完全に支配されることはないのです。その意味で私たちは、「恵みの下」に生かされているのです。

2. 肉のわざ

では、「肉」とは具体的に、私たちにどんな行いをさせるのでしょうか。19-21節を見てください。「**肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです。以前にも言ったように、今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。このようなことをしている者たちは神の国を相続できません**」。

ここには、肉の行いが十五個書かれています。これらは、四つに分類することができます。最初の三つ「淫らな行い、汚れ、好色」は、性的な罪です。次の二つ「偶像礼拝、魔術」は、異教的な罪です。そして次の八つ「敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ」は、人間関係を壊す罪です。そして最後の二つ「泥酔、遊興」は、お酒による罪です。私たちは、肉の欲望に身を任せて生きる時、性的な罪、異教的な罪、人間関係を壊す罪、お酒による罪に陥っていくのです。

イエス様を信じる私たちにも、このような罪に陥る危険性があるのです。なぜなら私た

ちの内に、まだ肉の欲望が残っているからです。パウロは、「このようなことをしている者たちは神の国を相続できません」と言っています。この意味は、このような十五個の肉の行いの一つでも行っていたら、天国に行けないという意味ではありません。そうであれば、誰ひとり天国に行くことができないからです。そうではなく、これらの十五個の肉の行いを継続的に、何の良心の責めもなく、平気で行ない続けるなら、という意味だと思います。イエス様を信じる人は、御霊が心に住んでおられるので、このような肉の行いをする時、必ず良心の責めを感じ、「肉」と「御霊」の戦いが起こるのです。決して平気で肉の行いを続けることはできないのです。たとえ肉の行いを続けたとしても、苦しみながら続けるのです。イエス様を信じて、御霊が心に住んでおられる人は、何の良心の責めも感じず、平気で肉の行いをするのはできないのです。逆に、イエス様を信じないで、御霊が心に住んでいない人は、何の良心の責めも感じず、平気で肉の行いをする事ができるのです。こういう人は、「神の国を相続できない」とパウロは言っているのだと思います。罪を犯した時に、私たちの内に良心の責めを感じる、「肉」と「御霊」の戦いが起こり苦しみを覚えるなら、私たちは確かに「恵みの下」にいること、私たちの心に確かに御霊が住んでおられること、私たちは確かに天国に行けることの何よりの証拠なのです。

3. 御霊の実

では、「御霊」が私たちの心に住まわれる時、私たちはどのように変えられるのでしょうか。22-23節を見てみましょう。「**しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。**」

聖霊は、私たちの心に住まれ、私たちに豊かな人格の実を結ばせます。ここには、御霊が私たちの内に結んでくださる実が九個書かれています。最初の三つ「愛、喜び、平安」は、神様との関係で結ぶ実です。次の三つ「寛容、親切、善意」は、人との関係で結ぶ実です。そして最後の「誠実、柔和、自制」は、自分との関係で結ぶ実です。今回、この御霊の実をギリシヤ語で見た時に、改めて教えられたのは、「寛容」という言葉は、「忍耐」と訳せる言葉であること、そして「誠実」という言葉は、「信仰」と訳せる言葉であることです。御霊は、私たちに信仰を与え、忍耐する力を与えてくださる方であることを改めて教えられました。

パウロは、「このようなものに反対する律法はありません」と言っています。御霊は、私たちの内に働き、神様の律法を行なう力を与えてくださるのです。神様の律法の中心は、神様を愛し、隣人を愛することです。神様は、一言で言って、私たちに「愛」を求めています。そして、私たちの内に御霊が結んでくださる実の第一番に挙げられているのが、「愛」なのです。私たちは、自分の力で律法を行なうことはできません。自分の力で、愛の人になることも、豊かな人格を持つ人になることもできません。イエス様を信じて、御霊が私たちの心に住んでくださる時に、御霊の力によって、私たちは律法を行なう人、愛の人、豊かな人格を持つ人に変えられていくのです。

ただ、ここでは御霊の働きは、「実」と呼ばれています。植物の「実」は、実るまでに時間がかかります。一日二日で実を結ぶことはできません。私たちの内に愛の実を結ぶまで、豊かな人格の実を結ぶまで、律法を行なう力を持つまでにも、時間がかかるのです。私たちは、イエス様を信じて御霊が私たちの心に住んでくださったからといって、すぐに変えられるわけではありません。私たちが変えられるまでには、時間がかかるのです。

植物の「実」は、太陽の光や雨があって、成長し、実を結んでいきます。同じように、御霊の「実」も、御言葉があって、成長し、実を結んでいくのです。御霊は、預言者や使徒たちを用いて、「聖書」を私たちに残されました。神の御言葉である「聖書」は、何よりも御霊の働きによるものです。御霊はいつも「聖書」の御言葉と共に働きます。御霊は、聖書の御言葉を通して、私たちの内に働き、私たちの内に、愛の実を結び、豊かな人格の実を結び、律法を行なう力を与えてくださるのです。私たちは、ただ御霊の実が私たちの内に結ぶのを待っているだけでなく、太陽の光を浴びせ、水を注ぐように、聖書の御言葉を読み、聞かなければならないのです。

4. 肉を十字架につけて、御霊によって生きている

最後に、24-26節を見てみましょう。「**キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。私たちは、御霊によって生きているのなら、御霊によって進むではありませんか。うめぼれて、互いに挑み合ったり、ねたみ合ったりしないでみましょう。**

イエス様を信じて洗礼を受けた時、私たちは、自分の罪を、イエス様の十字架につけたとパウロは言います。私たちの教会では、洗礼の時、「滴礼」と言って、手で頭に水をかける形で行うことが多いですが、他の教会では「浸礼」と言って、体全体を水に浸す形で行うこともあります。「浸礼」は、体を水に浸す時に罪に死んで、体を水から起こす時に新しい命によみがえったことを表します。洗礼は、イエス様と一つに結ばれて、イエス様の十字架と復活と一つにされたことを意味します。その意味で、洗礼の時、私たちは罪に死んで、新しい命、御霊によって生きるようになるのです。パウロはローマ6章で、そのことを「**知らないのですか**」(ローマ6:3)「**認めなさい**」(ローマ6:11)と言っています。私たちは、イエス様を信じて洗礼を受けた時、肉の欲望や罪に対して死んだのです。そして今は、御霊によって生きているのです。それを私たちは、信じなければなりません。

今は、確かに私たちの心に御霊が住んでくださっています。しかし私たちの内に、肉の欲望、罪の性質が残っているのも事実です。そして、私たちは絶えず「肉」と「御霊」の戦いの中で生かされています。私たちには、二つの道があります。肉の欲望に従って歩むか、それとも御霊に従って歩むか。私たちはどちらかを選ばなくてはなりません。

イエス様を信じる私たちの内には、確かに御霊が住んでくださって、私たちは御霊によって生きているのです。しかし御霊によって生きているだけでなく、御霊によって進み出さなければなりません。肉の欲望ではなく、御霊の道を意識的に選び取っていかなくてはなりません。その時に、御霊は私たちの内に豊かな実を結んでくださるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

生まれながらの私たちは、ただ肉の欲望に支配され、肉の業を行ない、神の国を相続できない者でした。しかしあなたの恵みによってイエス様を信じた時、私たちは御霊を与えられ、恵みの下に置かれました。私たちはもう二度と、罪に支配されることはありません。たとえ肉の欲望に負け、罪を犯すような時でも、御霊が確かに私たちの心に住んでくださっています。私たちは生涯の最後まで、「肉」と「御霊」の戦いの中で生きていかなければなりません。しかしどうか私たちが、「肉」ではなく、「御霊」に従っていくことを選び取り、私たちの内に愛の実を結び、豊かな人格の実を結び、律法を守る力を与えられていくことができますように。時間はかかりますが、聖書の御言葉と共に働く御霊の力を信じていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。